

いのである。

然しながら、彫刻家は、確かに印度人でなかつたとしても、之がギリシア人であつた事を、確證し得るかといへば、余は難點とする所を伴はる所なく述べたいのである。若し印度人が、このギリシア化した點のある彫刻の作者であり得ないとすれば、ヨーロッパ人が、印度の教主としての十全の像を、如何して構想し得たかといふ事も亦疑ふ事が出来る。何となれば、終に今まで純ギリシア的の像を得た事はないからである。之は決して、ギリシア神の裸像、或は半裸像ではなく、僧衣を纏うて居、其の耳朵が非常に延びて、確かに印度の風習である重い寶石を耳飾にした跡を存し、更に、陰鬱な忍従の表情は、何等ギリシア神に普通な生活樂や、尊大の風と共通を見ないので、土着人がギリシアの技工を更に工夫し得たのではない事は明かであるが、而も、外國人が、佛教の宗教的感情を一層よく了解し、之を表はし得たとする事も疑問になる。

斯の如く、少くとも全然公平を期するものには、何人にも、兩方に困難が